



魔法媚薬

即効性と持続性に優れ、驚異的な浸透力を持ち、飲ませても皮膚に塗布しても強烈な快感効果を発揮する媚薬。

本来は闇ルートで取引されている薬品だが、

昨今は一般市民にも一部流通しており、アダマンティウス・リベラティオが警戒する薬物の一つである。

その原料は特定のマーゴが作り出していると言われているが、その実態は全くと言っていいほど掴めていない……

今回アイシヤは魔法媚薬の取引が行われるという情報を得た突入作戦の護衛として同行していた。

こういっただ取引にはマーゴが用心棒がいる事が多い為、マーゴいっただハンターが同行するのだ。

取引現場に侵入すると絶賛取引の真っ最中だったのだが、その中のバイヤーと思われる男が、

”自分達は魔法媚薬の原材料を提供してくれるマーゴが住んでいる場所から来た“

という発言をしていた事で逮捕の優先順位が決まった。

「マゴは……森？」

だが突入作戦は用心棒をしていたマゴに
作戦の存在が露見してしまい、
状況が混乱する。

アイシヤはその場のマゴ全てを討伐し、件のバイヤーを追ったが、
彼らが逃げた扉に続いて入ると、そこは森の中だった。

アイシヤは困惑したが、このように空間を操作する
マゴには幾度も遭遇してきた。

残念ながら通信や自分が今いる場所は分からない状態だ。
なのでアイシヤは脱出の為、この場を支配するマゴを探すことにした。

「～～～～～～～～～」





森の中を歩く事数十分、小型マーゴの襲撃を受けた。

小型マーゴは俊敏で、だが攻撃はしてこない、ただアイシャの身体に絡みつこうとしてくる。絡みつくくと小型マーゴの中心部が開き発光する。

拘束する力が強いので引き剥がすのが手間で厄介だと思いが、それによってアイシャの体に何かが起きてはいるわけではない。

しかし今のような状況にアイシャは心当たりがあった。

「これ……もしかしたらパワードレインかな？」

——パワードレイン——

一部のマーゴが使う特殊なエナジードレイン、

特徴としては、対象者自身が何をドレインされているかが極めて分かり辛いという事である。

エナジードレインは吸収の際には強烈な快感を伴うなどの実感が伴うのだが、パワードレインにはそういう実感が一切無い。

その為対処が遅れてしまい、パワードレインによって何が吸われているかを実感する時はすでに手遅れになっているという事になってしまう。

だがパワードレインを行うマーゴは本当に極々少数、
出会う事自体がレアケースで、
何をされたかが分かりにくい事も
あって十分な情報すら集まっていないのだ。

アイシャも過去に
パワードレインを使うであろうマーゴと
遭遇した事があったが、
結局何をされたか分からない内にマーゴを討伐し、
その後も検査でも異常が無く、
何の問題も起こらなかった為、
どういふものかなにかという実感が彼女には無かった。

「くっ……!! どれだけいるのよ。」

あれから数十分、小型マーゴの襲撃は絶え間なく行われている、

大体が十数匹単位で襲い掛かってくるが、飛び掛かってくるものは出来るだけ倒す、身体に絡みついたものは焼きながら引き剥がす。多少丈夫な小型マーゴとはいえ、アイシヤならば対処自体は難しくない、だが、動きが俊敏な為、必ず体のどこかに絡みつかれてしまう。

何をされているか分からない状況に一抹の不安を覚えたアイシヤは、

（ちよつと上に上がってみるか。）

と左足に収められているアニマウェポンを起動しようとする。



「アッ!？」

だがアイシヤのアニマウエポンは起動しなかった。

（くっ…やっぱり、か。）

アイシヤは真っ先にパワードレインの影響だと確信する、

（アニマウエポンを無効化するって事…!!??マズイ!）

そう思った瞬間、
アイシヤのアニマウエポンが次々に分解していく…。

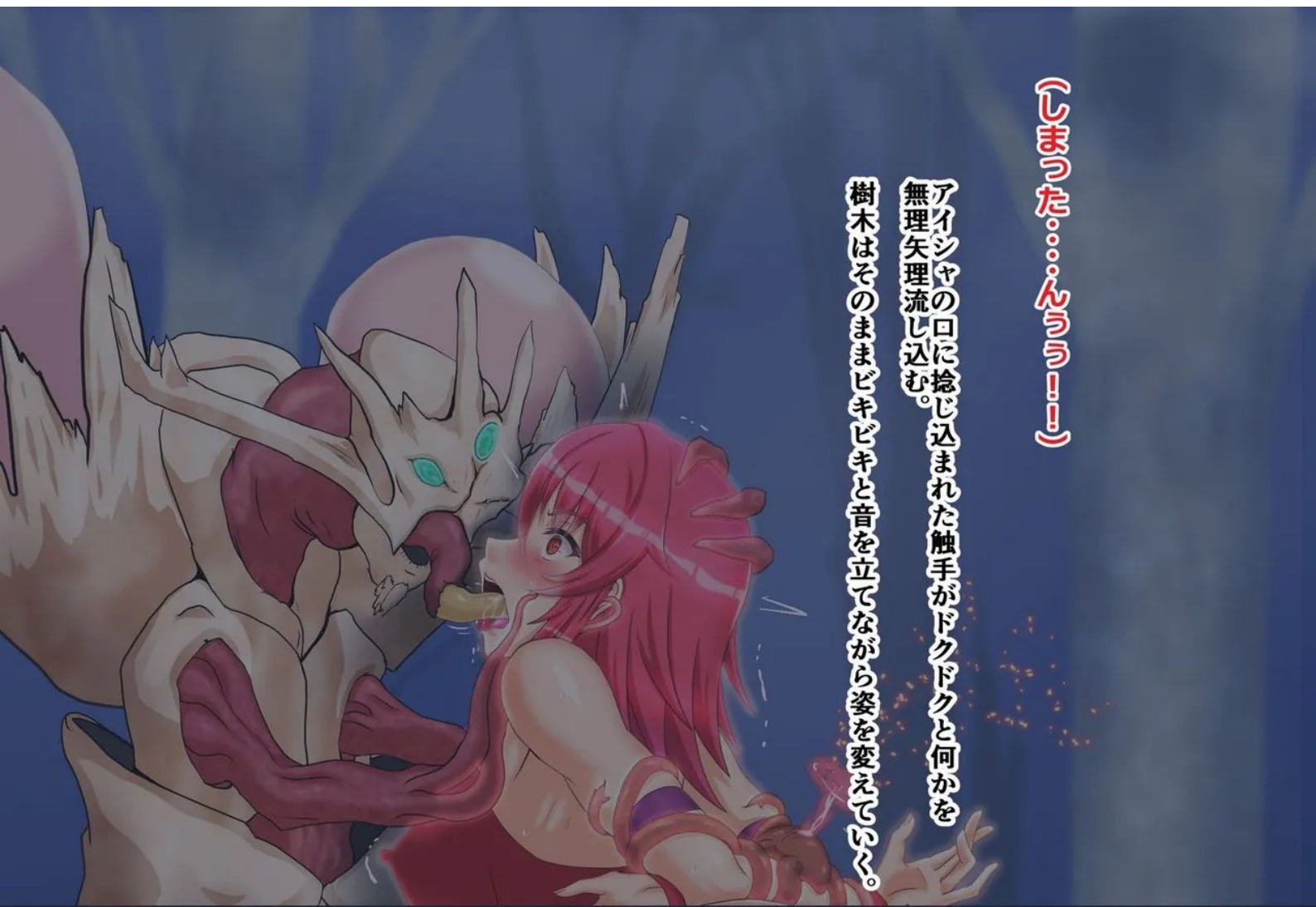
明確な対処法が無い今の状況で
武器を失う焦りが一瞬の油断を生む。

手足に小型マーゴが絡みつき、
腕は後ろ手に拘束するような形で絡みつかれてしまう。

（しまった…んうう！！）

アイシヤの口に捻じ込まれた触手がドクドクと何かを無理矢理流し込む。

樹木はそのままビキビキと音を立てながら姿を変えていく。





「……ん♡……うぁ……はっ……はっ……。」

魔法媚薬を大量に飲まされ意識が朦朧としていたアイシヤを捕らえていたマーゴは3穴から触手を抜く。

次いでアイシヤの周りに新たな樹木が出現する、樹木の先端には半透明な膜に包まれた大量の魔法媚薬を讀えている。その樹木から触手が伸び、アイシヤの体に絡みつく。

魔法媚薬を注いでいたマーゴは触手にアイシヤを受け渡すと、メキメキと音を立てながら小さくなり、地面にその姿を消した。

触手はアイシヤを縛り、無様な恰好で固定する。

だが触手は挿入されているだけで何もされてはいない。

（……いま……ならあ……あう……くう……）

思考はまだ満足に廻らないが、意識にかかるとピクピクの雷を振り払い、エネルギーをまだ吸われていない事に気付いたアイシャはアニマウエポンを顕現させようとする。だが、アニマウエポンはまだアイシャの意思に反応しない、おそらくはまだ小型マーゴの能力が残っているのだからとアイシャは判断し、次の脱出手段を考え始める。

触手に空いた穴から先端に針のようなものが付いた触手が伸び、それが次々とアイシヤの体に突き刺さっていく。

「んああー、ふえっ……なんれ……っ！」

アイシヤの身体には常に強力なバリアが張られている。エネルギーが十分であれば、寝ていたり無意識下でも張れていた筈なのだが、針は次々とアイシヤの体に突き刺さっていき、魔法薬のお陰か、刺さる痛みは殆ど感じないが、思いがけない事態にアイシヤは困惑する。




周りにそびえ立った樹木の膜袋がぶるりと震えたかと思うと、体中に突き立てられた針から魔法媚薬が注射されていく。

こんくうっっー♡♡♡
こ…れ…さ…ま…ま…で…は…♡♡♡
くらべもの♡♡♡

魔法媚薬は生物に触れると液体としての性質を無くし、濃厚な淫気を含んだエネルギーに変化する。

血中で淫気となった魔法媚薬は血流に乗ってアイシャの体を巡り、快感そのものが全身に広がっていく。先程の飲ませられる際に覚えた快感とは違い、体の中から膨れ上がる快感に一線を超えまいと必死に耐えるアイシャだったが。



更に口、膣、アナルに挿入された触手から魔法媚薬が注入され、耐えられなくなつたアイシヤの快感が堰を切る。彼女の体がガクガクと震え人形のように硬直し、熱い愛液のシャワーを迸らせた。

短時間に大量に蓄積された魔法媚薬の効果で異常発情状態にあつた体に更に血管からの魔法媚薬の投与にアイシヤの身体は耐えられず、身体中で快感の稲妻が絶え間なく炸裂し連続絶頂状態に陥ってしまった。

「ククク、よい養分になりそうだな……。」

「んんん♡♡♡!、ん♡♡♡ん♡♡♡ん♡♡♡!」

森のどこからかマーゴのしゃがれた声が聞こえる。

—声の出所が分かれば、本体の位置が分かる、光明があるかもしれない—
アイシヤは身体中で炸裂する絶頂の快感に震え流されそうになるが、それでも必死に意識を繋ぎ止め、マーゴの位置を探ろうとする。

「まだ意識があるのかな?、マーゴハンターらしいのう、では折角だ、最後に良い事を教えてやるうか。」

自分の能力が使えないのが不思議ではないかな?。」

「んんん?…んんん…おうっ…♡♡♡!」

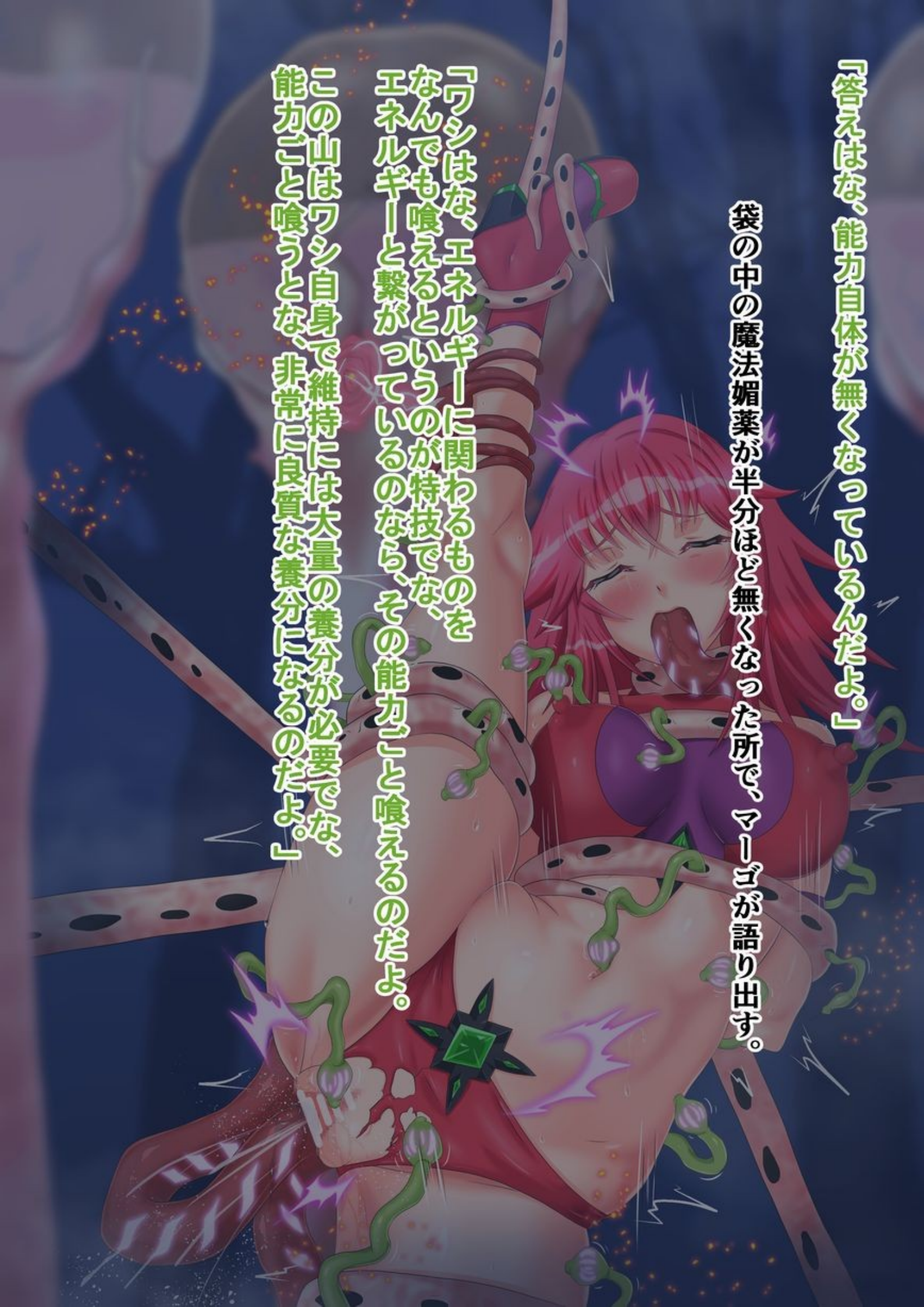
アイシヤの思考がマーゴの言葉に反応する。

「答えはな、能力自体が無くなっているんだよ。」

袋の中の魔法媚薬が半分ほど無くなった所で、マーゴが語り出す。

「ワシはな、エネルギーに関わるものをなんでも喰えるというのが特技でな、エネルギーと繋がっているのなら、その能力ごと喰えるのだよ。」

この山はワシ自身で維持には大量の養分が必要でな、能力ごと喰うとな、非常に良質な養分になるのだよ。」



「んっー!?……!?」

(……!?、そんなー!?)

馬鹿な、とアイシヤは思ったかった、

だが先程アニマウェポンを顕現出来なかった時に感じた違和感、エネルギーが十分にある状態でもバリアが張れない事、

彼女の根源にある力はマーゴハンターに成った時から

常にあり続けたもの。

たとえ今のよう快感の霧に意識を奪われかけていても、

それでも少しは感じられたはずだ、

感じられない事を相手の能力により封じられたとっていた、

思い込んでいた。

だがマーゴの説明により

アイシヤは自分の能力であるが故に納得してしまったのだ。

「んぐうううううー!んうううんー!」

「いやっ!みんなのためっ!ダメエー!」

理解してしまえばもう自分の力を奪われていく事が如実に自覚できてしまう、
自分の中から奪われてはいけけないものが奪われている感覚に
かつてない程の恐怖を覚えるアイシヤ、抵抗をしなればと
思考はまとまらないが兎に角何かを、抵抗をしなければと
無理矢理にも拘束を解こうと足掻く。





「もう何をしてても無駄だよ、ワシに食われた力は二度と元には戻らん、
おぬしはこの山の養分として生きていくしかないのだよ、
ククク。」



モンス・ロディア

山一つの大きさを誇るマーゴ

本体を別次元に置き、
様々な場所に入口を作り、
迷い込んで来たものを捕らえ
山の養分とする。

樹木を变形させ
多彩な攻撃を仕掛けてくる、
小型の個体もいるが
全てはモンス・ロディアの一部である。

魔法媚薬と呼ばれる
強力な薬品を生み出す事が出来るが、
本来の能力は
パワードレインという
特殊なエナジードレインで、
エネルギーに関連する
全てを吸収する事が出来、
その者のエネルギーに
連なっているものであれば
武器でも能力でも
分解し
山の養分とすることが出来る。

最古のマーゴで
人間を取り込み自我を持った順番で
二度王に推された事があるが、
積極的に他者と関わる気が無く、
王の使命に興味が無いと
王にはならなかった、

だが王の候補になる程の
実力を持っている
強大な上級マーゴである。